



呪符

目次

- ・遺跡紹介 古城遺跡＝川に臨む古代・中世の集落世界＝ 2
- ・資料紹介 俳人・鶴田卓池の菅沼鷺宛書簡～師弟の交流を垣間見る～ 3
- ・寄稿 猿投神社所蔵重要文化財 古文孝経 4・5
- ・矢作川・越戸土場跡について 6
- ・献馬大将－仁田四郎忠常－ 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース 8



古城遺跡

＝川に臨む古代・中世の集落世界＝

豊田市教育委員会では、平成12年度に豊田市御立町の古城遺跡の発掘調査を行いました。思い起こせばこの年の9月に東海豪雨があり、豊田市でも様々な被害がありました。矢作川左岸、久澄橋の南東の発掘現場も、この豪雨の際、矢作川堤防の決壊により水没しました。被害は甚大で、1週間以上に及ぶ排水作業、土砂に埋もれた遺構の再検出など復旧作業に多大な労力が費やされました。苦労が多かった分、感慨深い調査となっています。

調査後は2年にわたり整理作業を進め、このたびようやく報告書刊行の運びとなりました。今回はその広報を兼ね、この古城遺跡を紹介したいと思います。



古城遺跡の位置 (1/25,000)

古城遺跡は豊田市市街地東部の矢作川左岸に形成された沖積低地に位置しています。低地から続く周辺の段丘上には縄文から中世にいたる遺跡が点在しています。愛知県立豊田東高校の御立町地区移転にともなうこの調査は、試掘調査の結果、河川と平行に南北に伸びる中洲状、あるいは舌状の台地上に遺構が広がっていることが推測されました。

本調査の結果、古代(7～10世紀)と中世(11～15世紀)期に形成された集落遺跡であることが判明しました。主な遺構・遺物には以下のような例が挙げられます。

[古代] 遺構：竪穴住居11軒、掘立柱建物11棟、土坑29基など

遺物：土師器、須恵器、灰釉陶器など

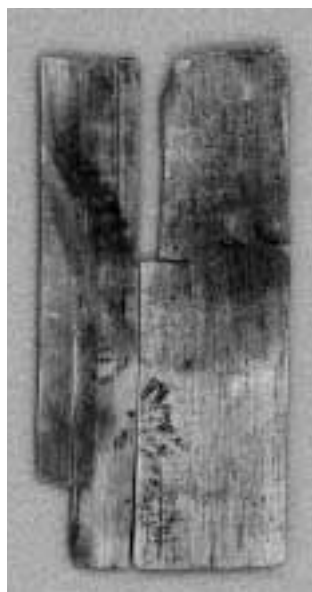
[中世] 遺構：掘立柱建物20棟、柵列8列、土坑130基、井戸4基、性格不明土坑8基など

遺物：土師器類、山茶碗、瀬戸美濃陶器、中国陶磁など

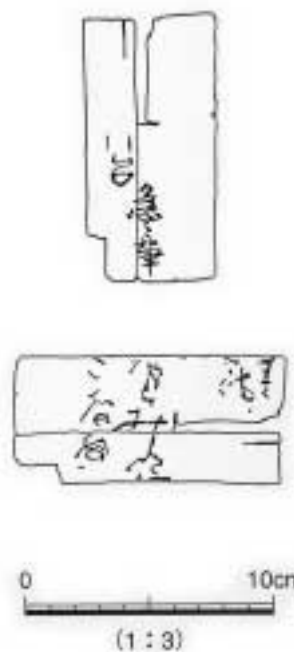
遺構数から特に13～15世紀を中心に繁栄した集落と

思われます。この時期の性格不明土坑のうち、方形の竪穴状遺構は半地下式の倉庫跡ではないかという見方もあります。比較的規模の大きい掘立柱建物群のある点を考慮すると、立地的にも物資の集散、船着場など川港としての性格を持つ集落であることが推測されます。遺跡の北半に集中する建物群と南半に集中する土坑群。そして井戸や倉庫跡。河川に囲まれた非常に狭い土地ではありますが、コンパクトな集落世界があったように思えます。

また、井戸内埋土の最下層からは興味深い資料が発見されました。札状に作られたと思われる木製品に「急々如律令」と墨書がされていたのです。裏には仮名の墨書跡も見られました。「急々如律令」は呪術関係の資料によく見られるまじないの文句で、「鬼よ去れ」といったような意味があります。もともと中国漢代頃からの公文書の末尾にくる決まり文句で、法律(律令)に従い事務処理を急げという意味の命令文です。これが道教の呪文となり、奈良時代には日本に伝来していました。古城遺跡ではこの呪符を使い、井戸に対して厄払いの祭りが行われたのではないのでしょうか。



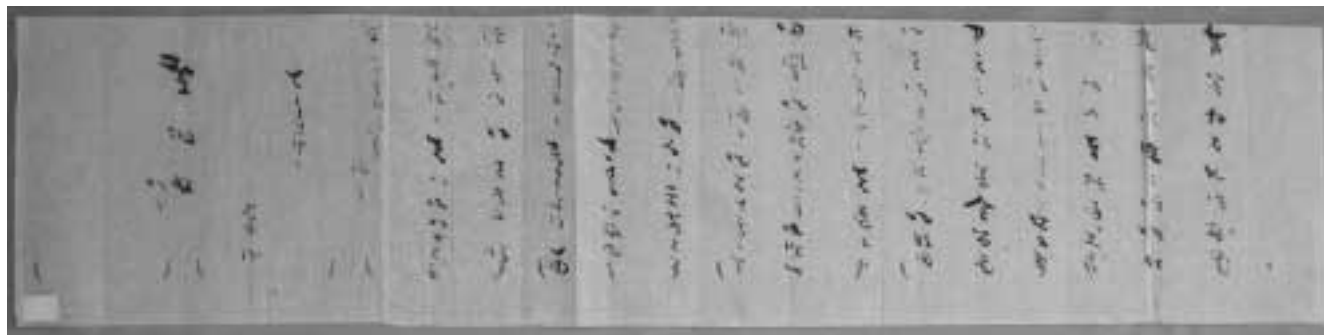
「急々如律令」の呪符



古城遺跡の調査によって、集落を確認できる細長い台地が沖積地の下から露呈した光景は、沈んだ島が再び浮かび上がってきたかのようでした。(成瀬憲作)

俳人・鶴田卓池の菅沼鷺洞宛書簡

～ 師弟の交流を垣間見る ～



鶴田卓池書簡（7月14日）田鳳訪問のお礼、句の批評、すりもの料のお礼が書かれている。

豊田市郷土資料館は、江戸時代後期の俳人・鶴田卓池の書簡を26通所蔵しています。卓池は、明和5年（1768）岡崎生まれ、紺屋を営むかたわら俳諧を名古屋の久村暁台・井上士朗に学びました。天保四老人として全国的に知られ、三河の俳諧の中心的な存在で、この時期に活躍した豊田市域の俳人も、その多くが卓池の門人です。

卓池の書簡は26通、ほとんどが鷺洞宛（1通は連名・1通は無記名）です。鷺洞は、九久平村（現豊田市九久平町）の俳人で、本名菅沼彦衛（左司馬）、菅沼家は領主である旗本の鈴木市兵衛家に国詰代官として仕え、武士としての格式が与えられた家柄です。

俳人としては、卓池の門人で卓池編の句集「すきぞめ集」（天保5年）、「俳諧こぼれ炭集」（弘化2年）をはじめ卓池門人の手による句集に多くその名が見られます。また菅沼家文書（当館寄託資料）の中には、「雪廣獨吟」4冊、「名月百吟」などの句集があります。こうした句集の中には師である卓池が添削した句もあります。



鶴田卓池書簡（8月7日）

大貼のお礼、引墨の句を送った旨が書かれている。

卓池の書簡をみてみましょう。お歳暮のお礼が4通、中元のお礼が3通、「引墨」についての手紙が13通あります。推察するに盆暮には祝儀として百疋ずつ師におくっていたようです。「引墨」というのは添削のことです。自分の句を師に送り、添削してもらい句の修練を重ねました。通例は、添削料を添えるものですが、この手紙からは、句を送るごとに謝礼を添えていたかはわかりません。盆暮におくられた祝儀は、あるいは月謝のような意味合いのお金であったとも考えられます。

ほかに鮎、わらび、山蔞、柿、そば、松茸、さらには兎肉をもらったお礼も見られ、地元の産物や珍しい品を送るといった師弟の交流を垣間見ることができます。

また「摺紙料」「摺物料」として南鐐（二朱銀）一片を何度もおくっていることがわかり、金銭的な援助者でもあったのではないかと考えられます。

門人同士の交流もありました。鷺洞の住む九久平村と巴川を挟んだ対岸の岩倉村に住む宇野篤司も卓池の門人ですが、篤司へよろしく伝えるように何度も書かれていますし、足助（門人・板倉塞馬がいる）へ同行する誘いの文面もみられます。また甲斐の国の俳人で、卓池の門人に田鳳という人がいます。この田鳳が鷺洞の元に遊びに来た際、淹脇の淹を見せに連れて行ったことへの礼が述べられている手紙もあります。

この他、書簡からは頼まれた短冊を10葉送った事、句集に載せる為でしょうか、花の句を依頼した事、句集出版のお祝いをとどけた事など様々な事柄を知ることができ、江戸時代後期の俳人たちがどのような活動をしていたのかを知ることのできる貴重な資料です。

（伊藤智子）

1. 『孝経』とはどんな書か

経書とは

「経書」とは、中国を中心とする東アジア漢字文化圏において、ながく価値ある書物と認められてきた一群の書物である。ある意味で、それは漢字文化圏の「古典」といってもよい。そして、ある書物が「古典」と認定されるかどうかは、現代日本において用いられる場合とはいささか異なり、国家、あるいは文化の総意として規定され、文化圏全体の教養として大きな影響力を持っていた。どの書物が「古典」であるのかということは、教養上の要請から、より直接的には官吏登用試験の出題範囲などといった形で制度的に確立していた。「経書」とは、その「古典」の筆頭にあげられる諸書、すなわち『周易』『尚書』『毛詩』『周礼』『儀礼』『礼記』『春秋左氏伝』『春秋穀梁伝』『春秋公羊伝』『論語』『孝経』『爾雅』『孟子』である。近代以前の、漢字文化圏において経書は、「教養人が必ず知っていなければならない」、「それを知らなければ文化人とは認められない」書物であった。

中国に限らず奈良朝以来、明治半ばまでの日本であっても、この教養システムは採用・運用されていた。その時代の日本人にとって、経書と呼ばれる書物群は外国文学ではなく、自らの文化伝統に属する書物であった。猿投神社に伝存する漢籍、すなわち『古文孝経』、『春秋左氏伝』『史記』『文選』といった書物は、鎌倉・室町時代の人々が、自らもその文化を担う一員としての矜持と自負と責任感をもってあつかった書物たちなのである。これらの書物を理解し伝えてきたこと、そしてその文化活動が現在の豊田市域でおこなわれてきたことは、この地が日本に誇るべきことである。

『孝経』とは

『孝経』は、儒教という教学システムが、ある程度確立してから世に出た書物である。内容は、孔子と弟子の問答体で、儒教の教えのうち、親子関係を中心とする倫理を説く。端的に言えば親孝行を奨める書物である。しかし、その最大の特色は、内容にもまして文

章の簡素さと短さ故に、文化・教養入門書として多用されてきたことである。すなわち幼学者が最初に理解、暗記すべき書物であったのである。

2. 『古文孝経』はどんな本か

『今文孝経』と『古文孝経』

『孝経』は、戦国時代(前403～前221)に孔子学派の人々によって編纂されたと考えられるが、その後、たびたび災厄を被ることになった。まず第一は秦の始皇帝による焚書である。この思想統制は、書物の絶対量が少なかった時代のことであり、『孝経』の伝存に大きな障碍となった。じっさい、漢時代になって、民間の書物保有が解禁された後、再び世に現れた『孝経』はわずかに二つに過ぎない。一つは、漢時代通行の文字で記されていたので、今風の文字の『孝経』という意味で「今文孝経」とよばれ、もう一つは、焚書以前の古い文字あるいは地方文字で記されており、古代風の文字の『孝経』という意味で「古文孝経」とよばれた。以後この両種が、互いに張り合いながら『孝経』伝承の歴史を形成してゆくのである。



重要文化財「古文孝経」 猿投神社所蔵

日本における伝存

『孝経』は、日本へ最も早く伝来した漢籍の一つである。奈良朝では官吏登用試験のテキストとして用いられたこともあり、奈良時代の鈔本(手書き本)が断片ながらいくつか伝存している。またその後の伝承にあずかって力があつたのは、経書の解釈を維持保存することを職務とする公家清原家である。

3.『古文孝経』の現存状況

清原家を中心とする『孝経』伝承の歴史の中では、実に多くの鈔本が生み出されており、室町時代以前のものだけでも三十種以上になる。もっとも古いのは奈良時代鈔本であるが、これらはわずかな断片にすぎない。ついで古いのがわが猿投神社本である。この鈔本は、建久六年(1195)の書写日付を持っており、さらに承安四年(1171)の清原頼業きよはらよりなりの直筆本を筆写した旨が記されているから、おおむね頼業のころの『孝経』の姿を伝えているとおぼしい。これに続くのは、仁治、建治、弘安といった、鎌倉時代の年号を持つ書写本である。すなわち猿投神社本は、首尾完具のものとして日本でもっとも古い「古文孝経」である。のみならず、「古文孝経」の伝承は中国ではすでに途絶えてしまっており、日本で最古のこの鈔本は、世界最古の「古文孝経」ならびにその注釈ということになる。

また、日本の漢学伝統の中心にあった清原家の学術は、鎌倉時代に大きく変化している。その改変を被る以前の古い学術伝統を、この猿投神社旧鈔本は保持している。さらに見のがしえないことは、この猿投神社本が、都の図書館に移ってしまったものと違ってその鈔本の発生・伝承と縁ある地域的・文化的背景の中に現在も伝えられている点である。この本が猿投神社に伝えられたことをふまえて、中世日本漢学の、東海地方への伝播普及の状況を考えることが可能になるし、神社という機関に伝えられたことにより、中世漢学を担っていた人々の階層的もしくは職種のひろがり考察することが可能になるのである。

4. おわりに

現在もっとも容易に入手できる『孝経』の概説書として、林秀一氏のものがあるが、そこではあまたの日本旧鈔本が言及・利用されているにもかかわらず、猿投神社本については、まったくふれられていない。

上述のように、猿投神社蔵旧鈔本の価値がきわめて高いにもかかわらず、そのことが一般に充分認知・活用されていない現状にあり残念である。この鈔本および、この本を通じての地域の歴史研究のためにも、朱墨点や墨色の判別が可能なカラー複製の出来を待望している。



重要文化財 「猿投神社漢籍」 猿投神社所蔵

5. 参考文献

・『孝経』全般について

- ・『孝経』 林秀一 1979年 明德出版社(中国古典新書シリーズ)
- ・『孝経』 栗原圭介 1986年 明治書院(新釈漢文体系35)

・日本の『孝経』旧鈔本について

- ・古文孝経旧鈔本の研究(資料篇) 阿部隆一 1968年(斯道文庫論集第六輯 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫刊)
- ・孝経善本集影 大阪府立図書館 1937年(小林写真製版所出版部刊)
- ・孝経の伝来とその影響—写本時代を中心として— 林秀一 1948年(同氏『孝経学論集』所収)

・猿投神社所蔵漢籍について

- ・猿投神社の総合研究 太田正弘 1993年(太田正弘刊)
- ・猿投影印叢刊(第1集~第34集) 村田正志編 1966年 猿投神社誌刊行会刊

矢作川・越戸土場跡について

江戸時代の交通は、人は陸路を歩き、物資は船で運ばれました。内陸部からの産物は川船で下げられ、河口の港で大型船に積替えられ、外洋を航海し消費地に輸送されました。都市から内陸への物資はこの逆の航路がとられました。川岸の荷物を積み降ろしをする港は土場とよばれていました。西三河の大動脈矢作川では三河湾から西尾、岡崎を経て、豊田市域へと遡り、その終着地は右岸では越戸、左岸では平井、扶桑町まで川船が往き来し、越戸、百々、古鼠の土場は賑わいました。本稿では越戸土場の跡について若干の紹介をしてみたいと思います。

矢作川右岸、越戸町神ノ木の堤防内、河川敷に通称「お釣り土場」とよばれる石垣が残されています。越戸公園の南端駐車場から下流にむかって、150mほどのところに位置しています。ちょうど平井公園の対岸にあたります。周辺は砂地でうっそうとした竹藪におおわれ、川幅もひろく、緩やかな流れが眼前に広がります。

石垣は下流にむかって、突出する形をなし、現状では長短二辺が観察され、長辺13m、短辺7m、高さ2m余の規模であります。本来はもっと大きかったと考えられ、今日残っているのはその一部とみられます。粗雑な四角形に加工した一辺60cm～1.2mほどのきめの粗い花崗岩で積まれ、それぞれ長辺側13、突端側8個、上下に最大6段を見ることができます。残念なこ



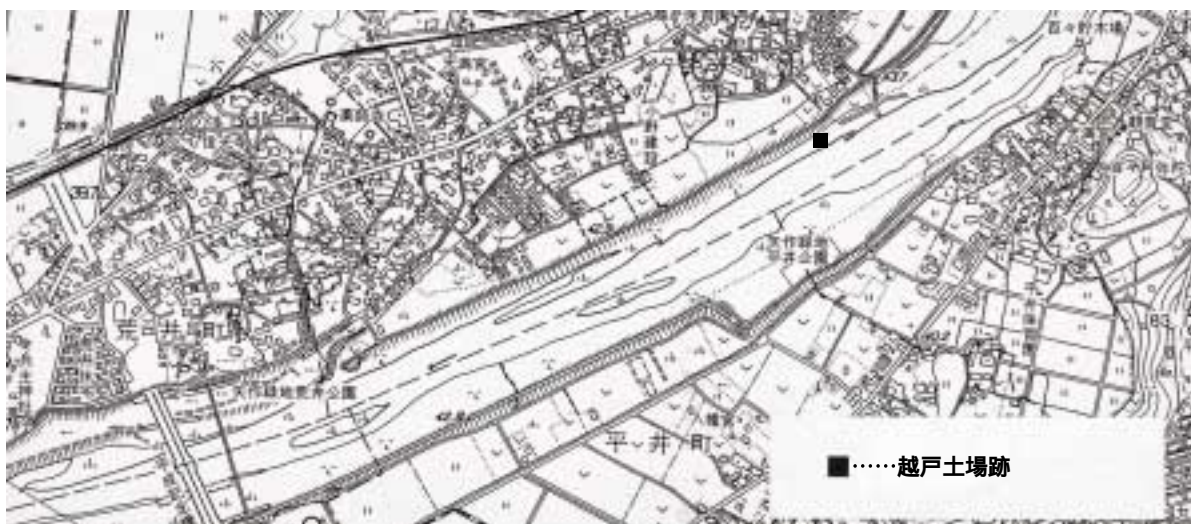
越戸土場石垣跡

とに隅が少し崩れかけています。露出している部分から下はさらに数mは埋まっています。露出部分は石垣の上端部と考えられます。上端部の石材は比較的大きな石が用いられていました。個々の石材を観察すると、割り砕く際に穿たれた鑿の痕が深く、幅の広い点が注目されます。幅の広い鑿が石材の切出しに使われるのは江戸時代の特徴で、つまり石垣の構築の上限が江戸時代に遡る可能性があるということです。もちろん何度かの積替えや補修はあったと思われます。

矢作川の流れと石垣の位置関係を検討してみると、平戸橋を通過した矢作川は東、左岸側に大きく湾曲し、ピークが百々町の沿岸に達し、そのはね返りで再び大きく西に向きをかえ、右岸の荒井公園の上手、越戸排水路との合流点にむかって流れています。石垣は流れが西に向きを変えたやや下流にあり、水流が緩やかで水量も多く、淀んだ場所で船の着岸に適していたことが伺われます。この付近より上流は主流が東に偏るため浅すぎ、下流では流れが速いため船の逗留は困難であったと考えられます。

このように石材加工と地形的制約からお釣り土場周辺が江戸から大正時代につづいた越戸土場の跡と推定できると思われます。越戸土場は矢作川右岸最上流の土場で、右岸流域のたいへん広い地域からの年貢米や林産物の集散地としてさかえ、問屋源兵衛、岩井喜三八、弥平、弥重、中屋などの荷物を取り扱う問屋のあったことがわかっています。三ヶ村(藤岡町)や加納村(豊田市)の縄が米津土場(西尾市)を経由して江戸に送られた荷物の送り状が知られています。

(松井孝宗)



献馬大将 — 仁田四郎忠常 —

寺部の八幡宮(社町)のお祭には、「でっくりぼう」と呼ばれる2体の武者人形が奉納されています。これらの人形は木偶人形で、「でっくりぼう」あるいは「おでくさん」、「おでく」と呼ばれ、お祭りに馬を奉納するときの、飾りとして使われたものです。

豊田では馬を奉納することを献馬^{けんば}といいます。献馬は村の祭礼に奉納されるのですが、これとは別に猿投神社の猿投祭りや、足助八幡宮の足助祭り、六所神社の宮口祭り、知立神社の知立祭りなどは、近郷近隣の多くの村が集まり馬を奉納するため、標具^{だし}や標具巻^{だまき}、駄覆^{だおい}、鞍^{くら}、泥障^{あおり}などの馬飾りには知恵^{だし}と贅^{だし}がこらしてあり、当時の人々の祭りへのこだわりが伝わってきます。

仁田四郎忠常^{にった しろうただつね}

寺部八幡宮に奉納されている人形は、寺部の仁田四郎忠常と高橋の楠正行といわれています。

忠常は源頼朝の家来で、頼朝が富士裾野ケ原で巻狩りを行ったときに、猪を退治したことで有名です。この人形もそのときの様子を表したもので、怖い形相をしています。



献馬と仁田四郎 昭和28年頃 寺部

けんばたいしょう
献馬大将

文政九年十月吉日造中町一同
源頼朝富士裾野ケ原巻狩之図
家臣仁田四郎忠常猪狩之図
作者不明奉献馬大将千秋楽万才叶
一同
(仁田四郎人形収納箱書より)

「文政九年(1826年)10月に中町(寺部)が人形を造る。源頼朝が富士裾野ケ原で巻狩りを行い、家臣仁田四郎忠常の猪退治の様子である。人形の作者は不明。献馬大将を奉納すれば万事願が叶う。一同」

この中で注目したいのが、奉献馬大将という文字です。献馬では、札や幣、鳥毛、矢、的、幌など様々なものがの標具に使われ、変わったものでは馬に水を与える柄杓などを使うところもありました。そのなかで献馬大



源頼朝 額に大きな傷がある

将といわれるこれらの人形は、特に献馬群の中心的位置付けにあったと考えられます。献馬が行われる祭りは別名警固祭り、ケンカ祭りといわれ、馬付きだけでなく、棒の手や火縄銃まで警護に付くようになるほど、非常に荒っぽい祭りでした。実際、旧西野村の源頼朝(穂積町)の人形の額には、石つぶてを当てられたと思われる傷跡が大きく痛々しく残っています。

現在、お祭に献馬を行うところはわずかになってしまいましたが、豊田の歴史と文化を伝える貴重な祭事として後世に伝えたいもののひとつです。

(蟹 一夫)

シラヒゲ草は、ユキノシタ科ウメバチソウ属の植物で山間の湿地や溪流沿いの湿ったところに生える多年草です。高さ15～30cm程の茎の頂部に、直径2cmの白い5弁の花をつけます。花弁の縁が細かく裂けているのが特徴です。葉はハート型で茎を抱くようについています。開花時期は夏から初秋にかけてです。本州・四国・九州に分布しています。

比較的高所の湿地を好むシラヒゲ草ですが、低地に自生することは珍しく、愛知県下では昭和45年に市内御船町で初めて確認されました。

文化財シリーズ

47

シラヒゲ草自生地
(市指定文化財)



昭和46年5月20日に豊田市指定天然記念物に指定され、現在は保護のため自生地周辺の1,030平方メートルをフェンスで囲み、除草や周囲の木を伐採し日当たりをよくするなどの手入れを行っています。近年は600株以上に増えています。

資料館NEWS

文化財防火予防デー

毎年1月26日は「文化財防火予防デー」です。これは、昭和24年(1949)1月26日に奈良県法隆寺の金堂壁画を焼損したことから、文化財に対する防火意識の高揚を図ろうと昭和30年(1955)に設けられました。

豊田市では1月26日に松平町高月院、力石町如意寺、1月27日高岡町六鹿邸、猿投町猿投神社で防火訓練の実施をしました。

郷土資料館だより定期購読者の募集

平成16年度豊田市郷土資料館だより定期購読者の募集をします。年4回発行、送料込みで400円です。

ご希望の方は、400円分の切手を添えて郵送もしくは直接受付へお申し込みください。たくさんのご応募をお待ちしております。

○発刊図書案内

豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
『古城遺跡』 3,000円

本号2ページで紹介しました、平成12年度に発掘調査をした古城遺跡の報告書です。古代・中世集落の遺構や井戸から出土した呪符などが報告されています。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.47■

平成16年3月31日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com